

Moving Trans History Forward 参加報告

(2023年3月29日～4月2日、ビクトリア、カナダ)

武内今日子

東京大学大学院情報学環 特任助教

2022年度奨学生

渥美国際交流財団「博士号取得者の海外学会派遣プログラム」から助成金を受け、世界でも有数のトランスジェンダー・アーカイブを有するビクトリア大学（カナダ）において、3月30日から4月2日にかけて開催された、Moving Trans History Forwardに参加し、研究報告を行なった。

参加に至る経緯

私はこれまでに国際報告を行なった経験がいくつもあるが、それらは主にアジアにおいてであった。英語圏で成果を発表したいという気持ちはないわけではなかったが、英語を話すのが得意ではないこともあり、具体的な行動には移していなかった。また、研究協力者に見える形で成果を残すことも必要だし、日本においてトランス史に関する一般に手に入れやすい情報は未だに多くないという点でも、日本語で書いていく重要性はあると思っている。

とはいえ最近では、英語圏でも成果を発表していかないといけないと感じるようになった。英語圏のトランス史の動向に関する文献を読むと、東アジアのトランス史はほとんど明らかではないという記述に時折出くわす。実際には、英語圏と比べて数こそ多くないかもしれないが、女装コミュニティ史やトランスジェンダーに関する概念史などが蓄積されているはずだ。しかし、英語圏の研究者は多くの場合、翻訳ツールの発達にもかかわらず、日本語の成果を確認していないと思われる。他方で、私も中国語や韓国語など、英語や日本語以外の言語で書かれた著作を積極的に読もうとしてこなかった。研究の蓄積がなかったことにされないようにしたい、あるいはこれまで知らなかった様々な地域のトランス史を知りたい、そういった気持ちから、Moving Trans History Forwardに参加し報告してきた。

実は私は学部生の時から X ジェンダー研究会（主催：ソンヤ・デール）というものに参加しており、ソンヤさんから、Moving Trans History Forward など幾つかの国際学会の存在は聞いていたし、日本をフィールドに研究活動をしている英語圏の研究者との交流は持っていた。加えて、Moving Trans History Forward の主宰者・Aaron Devor 氏を招いた講演会にも参加していた。当時交流していた研究者の多くは海外で就職するなどしており、残念ながら現在はやり取りできていないが、今回の参加は同時にかれらとの再会を期待した側面もあった（それはかなわなかったが）。

Moving Trans History Forward での経験



3月31日は国際トランスジェンダー可視化の日（International Transgender Day of Visibility）であるためか、街ではフラッグを掲げた人々も見てとれた。今回は初めてのハイブリッド開催であり、オンライン、オフライン合わせて450人ほどの参加者があったという。

まず印象的だったのは、主催者の Aaron Devor 氏をはじめとするスタッフが、「多様なメンバーが集まっていることを意識してほしい」と繰り返し述べていたことだ。「数十カ国からの参加者がおり、さまざまな文化的・言語的バックグラウンドを持つ参加者がいる。時には、英語に居心地の悪

さを感じる人もいる。だからこそ、できるだけまだ話したことのない人に積極的に話しかけよう。そして、それぞれが自分に寛容になり、他人に寛容になろう」と。特に「自分に寛容になろう」という呼びかけは、英語に自信がなく、一人での参加で会話に加わることに消極的になりやすい私にとって心強い言葉だった。

ここで、参加者や報告内容の多様性に含まれるのは、人種やエスニシティの多様性だけではなく、先住民であることや、高齢・若齢であること、障害をもつことなどの多岐にわたる要素だった。オープニングを飾ったのは、カナダの多様な先住民であり、かつトランスジェンダーである人々の経験の語りであった。高齢のトランスたちのセッションでは、これまで社会をサバイブしてきた個人史や、年をとることがそれぞれのトランスジェンダーの人にとって持つ意味が語られ、さらに高齢の親を持つといった多層的な経験が明るみになった。若いトランスたちのセッションでは、かれらが二元的な扱いを強いる学校や、信頼できるとは限らない教師や親との関係を生き抜いていく仕方が語られ、大人たちがサポーターであることの重要性も浮かび上がった。

加えて印象的だったのは、トランス史を冠した学会ではあったが、報告の主題も、雑誌の言説分析やアーカイブ形成といった歴史の側面が強いものだけでなく、自己の位置づけや、恋愛とトランスであることとの関わり、就職の困難とそのサポート、性別移行によって音楽経験がどのように変化したか、ゲームにおける性別二元制とその乗り越えなど、日常のトランスたちの経験を広く扱うものだったことだ。これは歴史部会などとカテゴリー化されやすい学会では珍しいことかもしれないが、社会におけるシスジェンダー規範や、トランスたちの個人史における「活動」「運動」以外の多面的な生活の側面の重要性を考えると、トランス史の学会において必然的なことのように思われた。

私が報告したのは、日本において様々なトランスのグループに属してきた個人が、いかにしてXジェンダーという非二元的なジェンダー・アイデンティティのカテゴリーのもとで自己を位置

づけてきたのか、という個人史である。質疑応答では、日本の学会や研究会とは異なる観点から質問が寄せられ、勉強になった。すなわち、日本では社会学系のコミュニティに属しているため、どのような歴史を描くか、カテゴリー化の議論にどのように貢献するのかといったことが問われることがあるが、今回はむしろ、日本語の文法や代名詞について尋ねられるなど、日本の言葉であることに注目が集まった。ただし、こうした日本語の固有性への着目は、調査で得られた非二元的な性を生きる語りからすればやや外在的なものを感じられ、その点を質疑応答において詳しく説明できなかった私の英語表現力の不足が悔やまれた。加えて、韓国からの参加者が、韓国のノンバイナリーに関する経験との類似性を指摘し、これまで検討したことのない東アジアにおける日本のXジェンダーをめぐる経験の位置づけを考える貴重な機会となった。

とはいえ多様性があるといっても、全体としては、北米やヨーロッパのトランスジェンダーの経験や歴史が主な対象となっており、アジアの歴史を扱った報告はごくわずかであった。また、カナダで元々知り合いだった人達がまとまって話しているような雰囲気もあった。それでもカナダやアメリカ、韓国など多様な地域の参加者と今後も続くような交流を持つことができたので、英語で報告したり、部会を作ったりできるよう、この機会を活かして頑張りたい。



他には、プログラムに組み込まれていたアーカイブのオープンハウスにおいて、様々な資料を案内

してもらった。

アーキビストの方によれば、ビクトリア大学のアーカイブが大きくなったのは、イギリスの大学教授が持っていた資料など、幾つかの別のアーカイブの継続が困難になり、ビクトリア大学に寄贈された結果であるという。ごく一部ではあるが日本の資料も存在しており、その資料の一部はデジタル化される予定であるとも聞き、日本のトランスたちや活動・研究に携わる人々とのやり取りがおそらくほとんどないままに、資料が広く公開されることに複雑な気持ちにもなった。継続的に交流を持ち、(デジタル)アーカイブ化について知識を吸収するとともに、翻って日本におけるアーカイブ化の状況についても、多くの人を巻き込みつつ話していければよいと思う。